

---

# 純恋淡雪

池鷺緒梨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

純恋淡雪

### 【Zコード】

Z5984A

### 【作者名】

池鷺緒梨

### 【あらすじ】

春の雪は大きな牡丹雪のように降つてはすぐに消えてしまう  
1人の少女とその周りの人物達が織り成す、淡雪のような純恋ストーリー。

## 第一話

きじゅつ すずこ

私は、桐生鈴子は高校2年生になんとか上がることができて、新しいクラスには去年に引き続き仲良しの市川あゆみがいる。

始業式から数週間経つた頃には浮き足立つたクラスの雰囲気も段々落ち着いてきていて、あゆみの予想だと今日のHRで席替えが行われるんじゃないかなって。

席替えかあ……できれば窓側がいいな。

この時期は丁度良い具合に陽が射して、景色もいいからきっと気持ち良いはず。

そんなことを考えながら朝7時という相当早い時間に1人で学校に向かって歩く。

昨日の夜、ふと今描いている油絵のインスピレーションが沸いたから。

こんな時はすぐにでもそれを形にしたい。割とゆっくりとしたペースが特徴のうちの学校の美術部に入っているものの、色を重ねたくなってしまつたら早起きだつて苦にはならないんだ。

ガチャ、ガラッ……

顧問の先生には内緒で作った美術室の合鍵を使ってドアを開く。まず第一にカーテンを勢いよく開けて窓も開放すると朝の匂いが絵の匂いに混じり、柔らかな風が吹いて陽の光によつて茶色く透けたセミロングの髪を揺らす。お気に入りのそんな瞬間を楽しみながら深呼吸をすると暖かい日差しをいっぱいに浴びた。

HRが始まる1分前に教室に着いた。

2年2組。クラスメートの顔と名前はまだ完全には一致していないんだよね…。

「あつ、鈴子。今日遅かったね。おはよ！」

席に鞄を置くと、あゆみが駆け寄ってきた。

そう言えればいつもは私が先に教室着いてたつけ。

「おはよ～。絵描いてきたの。慌てて片付けてきたトコ」

「朝から？好きだねえ」

クスクス笑うあゆみは可愛い。綺麗に栗色に色が抜かれたロングヘアにはすくなく憧れる。これで彼氏がないなんて世の中間違ってる、と思つ。

前にじつは彼氏作らないのか聞いたことがあった。あゆみはそれなりに告白とかされてるのに、OKしたつて話をまったく聞かないから不思議に思つたんだ。

『私ね、兄貴がいるんだあ。2コ上なの。ムカつくけど、私と比べたらすごい頭良いし運動神経もそれなりなワケ』

そんな風に語り始めるあゆみに、私は意図を理解しきれなかつたで、思わず出た言葉…

『え？あゆみつてプログラン…？』

『違うから』

即答で否定されたけどね。

話を最後まで聞けつて怒られた。

『んで、私つて負けず嫌いでしょ？』

私は余計な口を挟まないように頷いただけ。

『だからさ、なんかやなんだよね。兄貴以下の男と付き合つてのが』

兄弟がいない私にとつてはむしろ分からぬ話だった。

結局曖昧に相槌を打つてあゆみに不満げな顔をされたのを覚えてる。ちなみに未だにその“兄貴以上”な人は見つかっていないらしい。

「…」？ 鈴子！」「

「えー？ あ、ごめん。何？」

「もう。だからね、私のカンが当たったの」

「カン？」

話を聞き流して回想に耽つていたせいでさつぱり分からない。あゆみは私の額に軽くデコピンをする。

「ほり、席替えの話」

「ああ！ 本当にやるんだ？」

「さつきコリリンに聞いたからまちがいない」

コリリンっていうのはこのクラスの担任の先生、本名は百合千晶。20代後半でそろそろ彼氏との結婚も陰ながら噂されている美人化學教師だ。

そう言えばさつきチャイムが鳴ったはずなのにコリリンはまだ来ない。

「そつか。やつぱりクジだよね？ 緊張するなあ」

「席替えくらいで何言つてんだか。とにかく一番前の列だけは回避しなきや…」

そうやつてあゆみが意気込んだところ数分遅れてコリリンが教室に入ってきた。

私達は目配せをして、お互いの健闘を祈つてから席に着いた。

私が引いた紙切れに書いてあつたのは“12”という数字。黒板に書き出された席の番号を確認する。

… まずは1列目。

「よかつたあ。一番前じゃないみたい」

それから端から順に確認していく。

驚いたことに、私の新しい席は希望通りの窓側。しかも、1番後ろの席。

「鈴子どこだつた？」

「ん？あの席！」

みんなが新しい席にあーだこーだと思い思いに騒いでいる時にあゆみが引いたクジを握りながら話しかけてきた。

私は自慢げに決まった席を指差す。

案の定あゆみは物凄い羨ましがり方。あゆみはと書つとけようび私と対角線上にある前から3列目の席だつた。

うーん、ちょっと離れちゃつたな。

やがてガヤガヤとみんなの席移動が始まる。私もなんとか席を移動し終えてふと前の席に目を遣つた。

さらさらの黒髪に色白、スラリとした体格の男の子。彼はさつさと席に座つて頬杖をついて外を眺めている。

確か、カツコイイつて評判の人だつた気がする。

曖昧な記憶を辿りながら私は左側にある窓に手をかけて、他の人の迷惑にならない程度にそれを開けた。春特有の気持ちい風が流れてくる。

こんな特等席、ずっと席替えが無くてもいいかも。

「…なあ」

「えつ？」

「…なあ」

いきなり声をかけられて素つ頓狂な声をあげてしまった。

前の席の彼がいつの間にやら窓に背を預けて横向の格好で座つて、私を見る。そしておもむろに口を開いた。

「桐生さんて絵描く人？」

「え？あ、うん…美術部に入つてる」

「ふうん」

「…あの…？」

いきなり何を言い出してんだろう。

私の頭上には疑問符がしこたま浮かんでいる。

前の席の人は教室の様子に目を遣つて、その少しの沈黙にどうすることも出来ないで内心困っているといきなり視線が重なつた。

「まあ、しばらくよろしくね」

「はあ…」

彼は私の曖昧な返答に気を悪くする素振りもなく、また椅子に真つ直ぐ座り直してさつきと同じように頬杖をつく。

変わった人…なのかなあ？

そんな感想を抱く。

私は一度外に視線を向けるも、またすぐに前の人背中に視線を戻した。

少し躊躇つたけど、軽く肩を叩く。

「ねえ、どうして私が絵を描くつてわかつたの？」

少しだけ顔をこっちに向けてから彼はさつき私が開けた窓を軽く指差す。

「風」

「風？」

「油絵の具の匂いがしたから」

「ああ…さつき美術室で少し描いてきたからかな」

「熱心だな」

クスリと笑つて、また前を向いてしまつた。

前言撤回。変つていうか不思議な人だ。

それからコリリンがみんなを落ち着かせてHRが始まった。私の目には、さつきの彼の笑顔がなぜか焼き付いていた。

## 第一話

もしも…

王子様が茨の城の中で迷つたとしたら。

白雪姫が眠る棺が、馬に乗つた王子様の視界に入らなかつたとしたら。

シンデレラが落としたガラスの靴を、王子様が気付かずに蹴つ飛ばしてしまつたとしたら。

そんな風に考えてしまつ私は、卑屈すぎるのかな…？

あゆみはモテはするけど基本的に男に興味がない。だからクラスメートですら、その名前をきつと私と同じように覚えてなんかないと思う。

「ねえ、あゆみ。あの人名前なんて…分かんないよね？」

それでも休み時間に入つて早速尋ねてみたのは、単に他に聞ける人がいなかつたから。相手は私の名前を知つていたのに今更本人に名前の確認なんかできなかつたんだ。

でも私が指差した先の人物…つまり、私の前の席の人を見たあゆみは一瞬の間の後

「ああ」

と言つたから驚いた。

「高坂夏たかさかなつだよ」

「高坂くん、かあ。てかあゆみ、なんで知つてんの？」

「鈴子が聞いてきたんじやん…」

私の疑問に呆れたようにため息をつくあゆみ。

いや、それはそなうなんだけど。

なんだか釈然としない気持ちでいると、突然教室のドアが開いてギヤルつぽい派手な女の子が入つてきた。その子はまっすぐ高坂くんの席へ向かう。

「夏！」

外を見ていた高坂くんは彼女に声をかけられて初めて気づいたようだつた。

「ね、今日アイス食べに行こうと思つて」

「そうか」

「も～。夏も一緒にだよ？」

「なんで」

「夏と一緒に食べたいからあ」

「行かね」

いやいやいや…さつきから3文字しか返答してませんけど…

それでもあの子はめげずに高坂くんに話しかける。それどころか、寧ろ嬉しそうと言つた方が適切だつた。

私が面食らつてその様子を見ているとあゆみがボソッと呟く。

「…うるさい」

「あの子すごいねえ。付き合つてるつてワケじや…」

「そんなことあるわけないでしょ。確か…佐原美月さはらみつきとか言ったかな。」

高坂の追っかけだよ」

「へ？あ、そうなんだ…」

あゆみのあまりに早い返事に少し面食らってしまった。

それにして、追っかけつて。

あゆみのあまりに早い返事に少し面食らってしまった。

「そんなことより鈴子。今日うちじいじ飯食べておいでよ？父親も兄貴もいないからさ」

唐突なあゆみのお誘い。思い出したかのよう言いつと、満面の笑みで少し首を傾げて覗き込む。こんなあゆみの仕草が出た時には既に拒否権なんてものは存在しない。

私は今までの経験上、すんなりとそれに頷いた。

あゆみの家は駅から少し離れた住宅街に位置する一軒家。

マンションで家族3人暮らしの私にとつては憧れだが、あゆみに言わせれば『駅から遠いのはとんでもなく不便だし、マンションのが高くてカッコイイじゃん！』って。

「鈴子ちゃんか。よろしくなー！」

「てこうか何でいるワケ！？」

今日の前で繰り広げられようとしている兄妹喧嘩。

あゆみのお兄ちゃん、孝介こうすけさんの挨拶に頷こうとしたらあゆみの声に遮られてしまった。

「なんでって…お前それが兄に対する態度かよ」

「鈴子に手出したら東京湾に沈めるから」

あゆみの絶対零度の声色に、私の肩へ伸びかけていた孝介さんの手が止まる。

「…よし、飯食うか！」

突然そう言つて話をそらすと孝介さんはむかとダイニングに行つてしまつた。

私は笑いを堪えることができない。

「…何笑つてんの？」

「別に～。仲良いんだね、お兄ちゃんと」

「だからブランコみたいに言つのよしてよね…」

あゆみは眉間に皺を寄せてそつ言つとキッチンから、おばさんが夕食の準備が出来たことを知らせる声がした。

私は住宅街独特的の駅までの暗い道を歩いていた。

あゆみの家からの帰り道。

隣には、孝介さんが並んでいる。

「あの、ホントに駅まで大丈夫ですよ？」

「いーからいーから。ちゃんと家まで送らないと俺があゆみに怒られる」

数十分前に突然あゆみがにこやかに口にしたのは『んじゅ 兄貴、鈴子のことよろしくね～』なんて言葉。

なんて言つた…今日の数時間でこの兄妹の力関係がだいぶ見えてきた気がする。

「…なあ、鈴ちゃん」

ふと孝介さんが口を開く。

私はいつの間にか孝介さんに“鈴ちゃん”と呼ばれるようになつていた。

「あゆみつてわあ、男とかいないの？」

「え？」

孝介さんの言葉に思わず吹き出しちつまつた。そしてからかいつつに言つてみる。

「あゆみがブランコなのかなと思つたら、孝介さんはシスコンですか

？」

「いやあ、俺はあゆみが大事だけね」

驚いたことに、サラリと孝介さんは言つ。

「それにもあゆみがブラコンつてことはないでしょ。いや、実際そうだったら俺にとつては嬉しい限りだけど。…あの扱いじゃあねえ」

大げさにため息をついてみせる孝介さん。

「でもあゆみ、言つてましたよ。孝介さん以下の男と付き合つなんて有り得ないって」

「…あゆみが？」

孝介さんは立ち止まつて驚いたように私を見つめる。  
もちろん私は軽い気持ちでその話をしただけ。  
だから孝介さんが見せた反応は意外だった。

「あの…？」

「あー…いや、鈴ちゃんがあゆみと知り合つたのつて高校でだつける？」

「はい。入学式で」

「そつかあ。うん、また遊びにおいで」

「え？ あ、はい…？」

よく分からぬ会話になつてきた。

不自然に頷く孝介さん。この違和感の理由を聞い詰めても、きっとこの雰囲気じや無駄だうなつて感じさせる妙な空氣。

疑問に思いながらも駅に近づいて、そして改札へ向かう。

「孝介先輩？」

…びっくりした。私たちが向かつていた改札から出てきたのは見知つた人。

孝介さんに声をかけたその人は…

「お？ 夏じやん！ 久々だなあ！」

高坂くん。

え？ この一人…知り合いなの？

私が混乱して突つ立つたままでいると、初めて高坂くんと田があつた。

「…先輩…妹の友達にまで手出してんですか」

「アホか。送るんだよ。つちに飯食いに来たの…」って、お前ら知

り合いで？」

朝と同じように、ふうん、と相槌を打つ高坂くん。

「同じクラスで席も前後。ちなみに自慢の妹サンとも同じクラスですよ。まあ…市川は一言もそんなこと言わないだらうけど」

「え、そうだつたのか？」

「何だらう、コレ。

高坂くんの口振りだと、あゆみと高坂くんは知り合いでたの？でも話してるとこりなんて見たことないし、田だつて合わせてなかつたはずなのに。

高坂くんはふと思いついたように孝介さんに視線を戻した。

「先輩、今度暇な時言つてくださいよ。知つてました？時季ときが帰つてきてるの。先輩にも会いたがつてるんですよ」

その言葉に、孝介さんは絶対に驚いたんだと思つ。

高坂くんの言葉自体にも…って言つのかな。その表情にも、何か含みを感じた。

トキつていつたい…？

私の視線に気づいて、孝介さんは出かかつた言葉を飲み込んだみたい。

高坂くんの肩に片手を置いた。

「ま、その話はまたゆつくり聞かせろよ。今はうちの女王様の命令でこちらのお姫様を城にお届けしなきやなんないからだ」

「…先輩それ寒い」

「つるせー」

二人は軽く手を振り合つ。

「じゃあね、桐生さん」

「うん…バイバイ」

…私は気づいてしまつた。

高坂くんが何気なく、私にも振ってくれた左手。  
その薬指に輝いていたのはシンプルな銀。

今朝の彼の笑顔を思い出す。

それと同時に、私の目に焼き付いて離れない、ちかちかとその存在を示す指輪。

ああ、そつか。

どうも私は、童話の中のお姫様にはなれないらしい。

私のこの履き慣れた黒いローファーは、蹴つ飛ばされる運命にあるみたいだ。

昨日は家に帰つてから何してたつけ?  
考えてもまつたく思い出せないや。

「あ…」

1つため息をついてから教室のドアを開ける。  
初めに目に入つてきたのは高坂くんだった。

…どうしよう。

挨拶する?…つて言ひつか、別に気まずくなる必要無いよね。  
私と高坂くんの間に何かあつたつてわけじゃないんだし…

「おはよ。どしたの?」

悶々と頭の中で考えを巡らせてゆつくり席に近づいていた私。  
高坂くんにいきなり挨拶されて驚いて固まつてしまつた。

「桐生さん?」

「え、あつ、うん。おはよ!」

慌ててそう言つて席に座る。

やつぱり視線が行つてしまつたのは彼の左手。  
昨日のコトが現実なんだと思い知らされる。

彼女…いるんだよね。

聞いてもいいのかな…?

「ねえ、高坂くん」

「ん?」

「……トキつて人、誰なの?」

ああ、もう。

自分の性格が凄く嫌になる。

なんで私はいつもこうなの?無難な行動ばっかり。

「時季…?」

ほんの一瞬、沈黙したのが分かつた。

高坂くんは話しゃすいように横向に座つていて、視線を教室に巡らせる。

「…宮本時季つていって、中学の時のダチ。バスケ部で一緒にさ、孝介先輩も同じバスケ部だつたんだ」

「バスケ部？意外だね」

高坂くんは確かに帰宅部だ。

運動つていうより、頭が良いイメージの方がある。

「俺は他に入りたい部活も無かつたから入つただけ」

いたずらっ子のような笑顔。

それでもバスケは好きなんだなって、なんとなく伝わってくるよ。

「だけど、時季は違う。あいつはバスケで食つてけるようになるのが夢だつたから。最初それ聞いた時はただのバスケバカかと思つたけど…それだけじゃなかつた。ちゃんと実力も伴つててさ」

その口振りから分かつたのは2人がすぐ仲が良いんだつてこと。

それから、高坂くんはこんな表情もするんだつてこと。

でも、ほんの少しだけ…寂しそうに見えるのは何でだろう？

「あいつのバスケはすごいよ。高校もスポーツ推薦もらつてさ。ボーラー奪つてシユート打つだけで高校に進学した。地方だけどバスケの名門校にね」

「そんなんにすごい人なんだ…」

「夏…！おはよ！」

突然の声。

驚いて視線を向けると佐原さんが教室に勢いよく入つてきたところだつた。

「おはよ」

佐原さんが目の前に来ると高坂くんが口を開く。…佐原さん、ドア開けつ放しだよ。

そんな風に心の中で呟いたあと、そんな自分にまた少し嫌になる。ふと見上げると高坂くんの前に立つている佐原さんと目があつた。…睨まれてる…？

「佐原」

「ん? 何い?」

高坂くんに名前を呼ばれると途端に表情が変わった。

分かりやすいなあ。

高坂くんは人差し指でドアを指差して言つ。

「お前ドア開けつ放し。閉めて来いつて」

「あーごめーん。早く夏に会いたくつてわ」

佐原さんは慌ててそれを閉めに行く。

高坂くんも同じこと思つてたんだって思つと、少し気分が明るくなつた。

佐原さんがドアを閉めて戻つてきた時にまたドアが開く。

見るとあゆみが眠そうな顔で入つてきただところ。

ほとんど佐原さんが一方的にだけ、話してゐるこの2人の間に入る

氣は起きない。

私は席を立つてあゆみに話し掛けに行つた。

聞けば、あゆみは私が帰つた後勝手に孝介さんのゲームを初期化して徹夜で攻略しようと頑張つてしまつたらしい。

『ダメだ。ちょっと寝てくる』

そう言つて1限目が終わつた直後に保健室へ行つてしまつた。

孝介さんの涙が目に浮かぶ。

『寝起きのあゆみにジューースでも買つていつてあげるか』

結局あゆみは戻つてこないまま1日の授業は終わつてしまつた。

鞄は教室に置いたまま、100円玉とケータイだけ持つて売店に向かう。

寝起きの悪いあゆみの機嫌をとるには、保健室へ起こしに行く前に

彼の大好きなレモンティーが必須だ。

売店は隣の棟にあるから、1階まで降りたら廊下と言つよつ“屋根

の下にある敷石の上” という呼び方のが的確な通路を通りなきゃいけない。

棟と棟の間にあるその場所は風通しもずいぶんよかつた。  
私が丁度その場所に差し掛かった時も例外なわけはない。

「あ…！」

慌ててスカートを抑えた拍子に、100円玉を落としてしまった。  
きれいに転がった100円玉は中庭の方へ向かう。

追いかけると、それを拾い上げてくれた男の人がいた。

「あの、すいません… それ私が落としちゃって」

「おっ、そっか。野郎だったら貰つちまおうかと思つてた」

はい、とその人は私に手渡してくれる。

「ありがとうございます」

私はお礼を言いながらも怪訝な表情だったと思つ。

その人は整つた顔立ちに金髪、耳には沢山のピアス。そしてなぜか

私服だったのだ。

「名前は？」

「え？」

女の子なら誰でもときめいてしまいそうな笑顔。

私にも少しは効き目があつたものの、あゆみの言葉を思い出して  
いた。

『鈴子、あんたは素直だけど無防備すぎるの。妙な男に簡単に名前  
だのアドレスだの教えちゃダメだからね！』

私の中で、今日の前にいるこの人は確實に“妙な男”に値する。

「…なんで教えなきやならないんですか」

「いやあ、出会つた記念に」

…なんなのこの人…？

私がそう思つた瞬間にポケットに入つてゐるケータイが振動した。  
取り出してみるとそれはあゆみからの着信。

「もしもし、あゆみ？」

私は目の前の金髪男を放置したまま電話に出る。

「あ、うん。今レモンティー買ってから起こしに行こうかと思つてたの。え？.. はいはい、買って行きますよー。ん、じゃね」あゆみは私がレモンティーを買って迎えに行くまでもう一眠りするらしい。

ため息をつきながら終話ボタンを押すと、まだそこにいる金髪男。「なんですか？」

「名前教えてくれないんなら、桃ちゃんって呼ぼうつと」唐突に満面の笑みで言う。

「何それ？」

「だつて桃ちゃん、今日のパンツはピ...」

「鈴子です！.. だいたい何でそんなことひ...」相手の言いたいことが分かつて、声を張り上げた。自分で顔が真っ赤になつてるのが分かる。

それを見ながら金髪男は面白そうに笑つていた。

「だつてほら、さつきお金落とした時に風がさ」

「見てたのー？」

「ブツブー。残念。見えちゃつたの。俺つてラッキー？」

この人つて.. !

私は何も言つ氣がなくなり、もつ無視してとつとと売店に向かうことにした。

「待つた、悪かつたつて」

その場を立ち去ろうとして歩き始めると腕を掴まれる。

「悪いと思つなら放して」

「そんな、冷たいじやん。お詫びにレモンティー奢るよ。鈴子ちゃんと、それからあゆちゃんの分もね」

なんであゆみのことまで知つてゐるのかとびっくりして思わず振り返る。

でもよく考えたらさつきの電話の会話を聞かれてたんだっけ。

思い出しても時既に遅し。

私は結局この人と売店に向かうしかなかつた。



ガコンッ。

「こういう場合はどうしたらいいのか、しつかりあゆみに聞いておけばよかつた。

「はいよ。レモンティー2つね」

「ありがと…」

私は紙パックのレモンティーを2つ受け取る。

そして今更ながらそんな後悔をしていた。

…まあ、でも。

これで私がさつせとあゆみの所に行っちゃえればいいんだよね。そんな結論に達して、私は心中で氣合いを入れる。

「それじゃ、私はもう行くから」

「ちよーっと待った」

金髪男は自動販売機に手をついて私の行く手を遮りてきた。危うくその腕にぶつかりそうになつて、驚いて顔を上げる。

「何…？」

「レモンティー買つてあげたじやん。俺図書室探してんの。案内よろしく…」

相手がこの人じやなかつたら、きっとこの爽やかな笑顔に対してもなんにイライラすることもないのだろう。

「お詫びつて言つたのそつちでしょ」

「うん、だからそれはあゆチャンの分」

金髪男は1つのレモンティーを指差す。そしてその方向をもう一方に向けるとニッと笑つた。

「鈴子チャンの分は…ね、これから案内してくれればいいから確信犯だ…。

今日は後悔先にたたずつてこうじとわざを身を持つて思い知る田ら

しい。

私は本日何度目かの、そして最大級のため息をついた。

そもそもどうしてこの人はここにいるんだろう？

学校に来て、それで図書室に用があるなんて。

「それで、そつちの名前は？」

「俺？白馬野王子様つていうの」

相手の粘りに負けて、結局私は金髪男を連れて図書室へ向かつていった。

私が尋ねるとしゃあしゃあとそんな笑えない軽口で返してくる相手に一瞬黙る。

「…へえ…」

「鈴子チャンひでえ…突つ込もつよ！」

そんなやり取りをしながらも図書室の前に着いた。

「はい、ここが図書室…」

「へえ。結構デカいじゃん。鈴子チャンもゆつくりしてけつて～」

「え？あ、ちょっと！」

無理やり私の腕を掴んできて、そのまま中に引きずり込まれる。図書室だということもあり、私は小声で文句を言つけどまったく聞こえていないみたい。

「何してんだよ、お前は…」

聞き覚えのある声。

天の助けだと思って見ると、それは机に向かっていた高坂くんだつた。

しかもその声はこの金髪強引男に向かっている。

「夏～。やつと見つけた！この学校まじ広すぎ。何？お前勉強なんかしてたの？似合わねー」

幸いにも図書室を利用してる人は少なかつたから助かった。

高坂くんに話しかける金髪強引男はガタンと音をたてて彼の向かい側に座る。いつのまにか掴まれていた私の腕は解放されていた。

「んじゃ、鈴子チャン色々ありがとな

「はあ……」

「ほら！あゆチャンのとこ行かなくていいのか～？怒つちやうづ」  
何？この人は高坂くんに会いに来たってこと？

多少混乱したものの、勝手に決めつけるような言葉に私は反論した。  
「あゆみに会つたことも無いのに勝手なこと言わないで！…それじ  
や、高坂くん、バイバイ」

私はそれだけ言い切つて図書室を出る。

そして慌てて保健室へ向かつた。

金髪強引男にはああ言つたけど…実際、あゆみは怒つてゐに違ひな  
かつた。

バタバタと廊下に足音を響かせながら、同じ一階にある保健室へ全  
力疾走。

「あゆみ、ホントごめん！」

「遅ーい！」

私がドアを開いた直後に謝つたのとあゆみの明らかに機嫌の悪い声  
が飛んできたのはほぼ同時だつた。

「どうして遅くなつたのか、30字以内で簡潔に述べて  
ベッドに足を組んで座るあゆみは正に女王様。

私はどうやつたら今までの経緯を分かつてもらえるか、縮こまりな  
がらも考えてみた。

「…いや、30字じゃ無理…」

結局出た結論がこれ。

あゆみは瞬きをしてブツと吹き出した。

「鈴子のコトだから先生の手伝いでも付き合わされたのかと思つた

「んだけど」

「それならどんなによかつたか…」

私はがっくりと肩を落とす。

興味津々なあゆみの隣に腰掛けると、私が持つてゐる2つのレモンティーにあゆみが気付いた。

「なんで2つも？鈴子いつもミルクティージャん

「それがさあ…」

私はさつきあつた出来事を詳しくあゆみに話した。  
つて言うか、ほとんど金髪強引男への愚痴だつたんだけね。

妙なあだ名の由来とか。

レモンティーではめられた、とか。

白馬野王子とか言つ強引な男だつたこととか。

何故かその人が高坂くんに会いに来ていたとか。

そういうことを一気に話し終えると、ふと視線を横で黙つて聞いていたあゆみに向けた。

「やう言えればあゆみ、高坂くんと知り合いだなんて知らなかつたよ  
…あゆみ？あーやみちゃん？」

珍しくあゆみはレモンティーに手をつけないでいた。

目の前で手を振つてみる。

「鈴子、そのバカ男は図書室にいるんだよね？」

「うん…たぶん、だけど」

あゆみは無言で立ち上がり私の手からレモンティーを取り上げる。  
そして何も言わずに保健室を出てしまつた。

「あゆみ！？」

びっくりした。

だつてあんなあゆみは見たこと無い。

それに…一瞬だけだけど、目が少し潤んでいるように見えた気がする。

たぶん図書室に向かつたんだ。

その理由は分からぬけど、気づいたら私もあゆみを追いかけて保

健室を飛び出していた。

あゆみは何も言わないまま図書室に入る。

なんだか心配になつてしまつて追いかけてきたものの…話しかけられるような雰囲気じゃない。

黙つて後に着いて行くけど気まずいことこの上ない。そんな風に考えていると突然あゆみは一つの机の上にレモンティーを2つとも置いた。

さつきまで私がいた場所に立つあゆみ。そこにはさつきと同じように、まだ高坂くんと金髪強引男が向かい合つて座つていた。2人は目の前に急に現れたレモンティーで初めて私たちに気付いた様子だ。

高坂くんは大して表情を変えない。

対照的に、金髪強引男はあゆみを見上げながら綺麗な笑顔を浮かべていた。

「あれ、あゆちゃん。久しぶりだねえ」

「…ふざけないでよ。これ返すから。それから鈴子にももう関わらないで」

ただでさえ居ずらかつた空気が凍り付いたような気がする。高坂くんが小さくため息をついたのが分かつた。視線を向けると黙々と勉強を再開してくる。

「あゆつてば相変わらずだなあ。ほら、鈴子ちゃん混乱してるゾ?」私を指差してケラケラ笑い始める。あゆみは私を振り返りもしなかつた。

その代わり…

パンッ！

静かな図書室に響いた乾いた音。

金髪強引男の笑い声は止んで、あゆみを真っ直ぐ見上げていた。

あゆみの瞳はやっぱり潤んで、じわっと広がっているはずの手の痛みを確かめるように右手を握りしめる。

静かに顔を上げた高坂くんと私の視線がその2人を見つめついて…私はまるで、時間がそこで止まったかのような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5984a/>

---

純恋淡雪

2010年11月27日06時01分発行